

## 建造物研究室 遺跡、庭園

### 昭和三十一年度庭園遺跡調査概要

これまでの庭園の図面は、テープ使用の平板測量に見取図を加味し

た程度のものしか作られていなかつた。しかしながら、庭園文化史を研究する上に、その精密な実測図は種々の面で欠くことのできない資料である。それゆえ、われわれは、平面図に海拔標高と等高線を入れる精密測量をおこなうこととした。こうした測量作業によつて、庭園およびその遺跡の現状を正確に記録することとなり、造園当時、自然地形が如何に利用され、改変されたかという点を推測し、造園技術を

考究する手懸りを見出そうとする新たな試みをおこなつてゐる。この意図のもとに、昭和28年から修学院離宮の調査を開始し、昭和29年学報第二冊として「修学院離宮の復原的研究」を出版した。その後は、京都大乗院庭園を中心とする中世庭園文化史の研究をとりあげ、これと関連した諸庭園遺跡の測量調査を実施しつつある。

#### 一 竜王山城跡

室町時代末期天文年間十市遠忠氏の拠つた竜王山城南城（海拔585.7m）から、北城（海拔521.7m）にかけて、山岳地帯約2平方kmの地形測量を行なつた。コンパス及びレベル等の測量器を使用し、縮尺五百分の一（製版用千分の一）に、5m毎の等高線を入れた地形図を製作した。

（天理市史120頁参照）

#### 二 永久寺跡

天理市袖之内にある内山永久寺跡一帯を、測距アリダード使用、平板及びレベル併用の地形測量を行なつた。縮尺三百分の一、等高線は50cm毎に入れた地形図を作つた。（天理市史939頁参照）

この寺は藤原時代永久年間に禅定院（後の大乗院）の権少僧都頼実が創始したもので、主要建築としては、本堂、真言堂、觀音堂、多宝塔、大喜院（大坊）等があり、大乗院の末寺であつた。現在それらの建物は一字も残らず、唯一棟、本堂の後方に建つていた鎮守三所明神社の拝殿（鎌倉期）が、近くの石上神宮攝社拝殿となつてゐるだけである。しかし本堂の位置周辺の地形はよく残つており、数多い僧坊敷地の土留石垣や通路や水路など、そのままに田畠の境界や畔に添つて残つてゐる。又西向の本堂の前面少し下つた所、大坊の南側に、現在灌漑用水に使用されている大きな池がある。この中島の池辺には信堀房という人が立てた庭石がある。詳細は内山之記、内山之事などの古記録、江戸時代に描かれた指図と照合すれば昔の姿が判る。（学報中世庭園文化史参考）

### 三 法 金 剛 院 跡

大乗院庭園が、藤原時代からのものであるかどうかを比較検討する目的で、法金剛院遺跡の地形調査を行なつた。区域は寺地は勿論のこと、山陰線花園駅と線路を距てたその南側の田畠や墓地や宅地をも含め、縮尺二百分の一、海拔標高と、50 cm 毎の等高線を入れた地形図を作つた。

### 四 京都御所の建築と庭園

京都御所離宮の研究の一環として京都御所内の主要建築の配置と、庭園の地形地物の実測を行ない、縮尺二百分の一、海拔標高と等高線 50 cm 毎を記入した図を作つた。

数年来近世禁裏御庭指図の整理によつて、慶長度、寛永度の庭園の姿が分つたのであるが、更に高槻市史料（藤直幹博士示教）によつて承応度築庭事情と、その作者がはつきりしたのである。又慶長度から寛永度、承応度、寛文度と、池庭、遣水庭と交互にかわり、延宝度になつて、今口のに近い形態となつたことを確認した。（昭和 33 年 10 月の造園学会に、協力者京大村岡正君と連名で報告した）

### 五 本泉寺、朝倉館庭園跡

大乗院庭園が、藤原時代からのものの改造であるか、室町時代新設かを判定する決め手は、どこでもいいから、これこそ地形も石組も室町時代庭園の本当ものであるといふものをつきとめ、それらを詳細に比較する以外にないと考えた。京都市内外に多い伝室町時代作品の多

くは、長年月の間に手が入りすぎていて、信用できるものがほとんどないといつてよい。そこで敢て越前に残る文明七年蓮如上人造営の確証ある金沢市二俣本泉寺、福井市東郊外足羽村一乗谷朝倉館の湯殿庭園跡、諏訪館庭園跡、南陽寺庭園跡等の地形測量を行なつた。そして縮尺は何れも百分の一、等高線は 50 cm 毎に入れた図が出来上つた。  
（学報中世庭園文化史参考）

### 六 妙心寺退蔵院庭園

妙心寺退蔵院と靈雲院とは京都市内に残る室町時代末期庭園と伝えられているが、その建物と庭園との関係から見て、疑問に思われる点があるので、詳細に調査して見た。実測図は縮尺五十分の一、等高線は 20 cm 毎に入れた。

こここの庭園に見られる枯山水様式は、全くの平坦地でなく、そこには地形の凸凹が加味されている点は、江戸時代初期のものとは違う。

### 七 慈照寺（東山殿跡）の建築と庭園

室町時代中期（東山時代）を代表する東山殿（現慈照寺）と大乗院とを比較するために詳細に実測を行ない、建築配置を入れ、縮尺百分の一、海拔標高と、50 cm 毎の等高線を入れた実測図を作製した。

その結果東求堂と觀音殿（銀閣）は、東西 28 m（92 尺 5 寸）、南北 30 m（98 尺 5 寸）の距離にあつたこと、池は觀音殿（銀閣）の南方 30 m の山麓にまで拡つていたこと、山腹の枯山水は露出した岩盤であること、その下方の湧泉の附近の石組も其後かなりいぢられていることなどが分つた。

（森 篤）